

Dance with Heart
The Kikunokai Troupe
We are burning with enthusiasm
in creating national art for the new era.
Chairperson Michiyo Hata

日本のおどり

発行：舞踊集団 菊の会

〒161-0031
東京都新宿区西落合2-21-23
03-5983-6001(代表)

菊の会京都八瀬研修所

〒601-1254
京都市左京区八瀬野瀬町10
075-712-8701(代表)<http://www.kikunokai.co.jp>

Dancing from the heart

新年明けまして
おめでとうございませす

尾上菊乃里こと

畑道代



新春のお慶びを申し上げます。

昨年一月から秋のトルコ公演にむけての準備に明け暮れた一年でした。そしてトルコから帰国して間もなく迎えた舞踊劇「藍の女」は菊の会が一丸となって全力で取り組み、大成功させて頂きましたが、これも日頃御甚力下さる皆様のお蔭と感謝申し上げます。

今年菊の会スタジオにおきましてほとんど毎月アトリエ公演を行い、若い人達と共に芸の基本の原点に立ち、芸の楽しさを身につける土壌作りをして参りたいと思っております。何卒かわらぬ御指導、御支援の程を、お願い申し上げます。

日本舞踊界に嵐を

A BLAST IN JAPANESE DANCING WORLD

舞踊評論家
西形節子
Setsuko Nishikata



昨年、久方ぶりに『藍の女』を浅草公会堂で拝見しました。菊の会の皆さんの熱演、そして百以上のステージをこなしてこられた畑代表のお葉さんの変らぬ若さと美貌、しつとりと厚みを増した芸に酔いしれました。と同時に、年を重ねた私にとってはまことに感慨深い舞台でした。

たしか初演は四半世紀以上も前のことだったでしょう。舞踊劇とはいえ三隅治雄先生のこの作品は演劇的要素の高い大作、主役のお葉さんをめぐる男性たちは他部門から演劇人の方が助っ人に出演されていたのではないかと記憶しています。おそらく当時まだ少年から青年期にかかる頃、厳しく鍛えられていた方々が今は立派に畑代表の相手役を堂々と勤められている舞台に接し感無量でした。今日の舞台が創られるまでには、師弟ともども多くの幾山河があられたことかと思うだけでも胸が痛くなるようです。

踊りが好きというだけでは勤められないこの作品、歌あり、芝居あり、和楽器（三味線、太鼓、笛、鉦）もマスターしなければ登場人物にはなりません。営々と三十年近い歳月をかけて今日の舞台を創りあげてこられた菊の会に永い歳月の重みを感じました。

この公演の半月前、トルコ公演にも同行した私はこの目で、菊の会団員の實力をしっかりと見届けました。古典と民族舞踊詩「海はるか日本を躍る」の北から南への民謡集のなかで「祝太鼓」の腹に應える響きはトルコ人も圧倒されました。そして最後の「阿波おどり」で一気に盛り上がり、日本トルコ国交樹立八十周年の記念事業は見事に成功、国際親善の成果を挙げました。

順風満帆いま、菊の会文化庁芸術団体重点支援事業の団体として認められ、追風に帆かけて絶好調の時を迎えていると思えます。

けれども、この状況を保持していくのは容易なことではありません。継続は忍耐です。畑代表が目指す日本舞踊の伝統と創造、そして普及の目的に向かつて、師弟の絆をますます深めて、日本舞踊の世界に嵐をふき起こしてください。

二〇〇五年の「菊の会」に大いに期待しております。

各地で感動の舞台!!



は菊の会創立7年目に当たる27年前に初演されました。これまでに100ステージ以上

により開催、続いて鹿嶋市、(財)鹿嶋市文化スポーツ振興事業団、江戸川区、埼玉県、埼玉コミュニティセンター、富士見市、富士見市教育委員会、(公演順)が後援、鹿嶋市教育

平成16年12月2日浅草公会堂での公演を拝見して、近來どの様な舞台からも久しく覚えることの無かった激しい感動を得て心嬉しく、静かに緞帳の下りてゆくを見つめ入りました。それは凄まじい程の感動でした。蛤御門の争乱と云う凡そ意味のない戦いに父を失い戦乱に便乗する卑劣な御用盗の為に母を失ったお葉が、近隣諸国侵略の富国強兵の誤った国是の直中で三味線片手に唄を求めて彷徨う姿に思わず涙し素材の素晴らしさに圧倒されました。



伝統芸能を考える会
角 道治
Michiharu Sumi

舞踊劇「藍の女」 菊の会公演を拝見して



過日は大変素晴らしいものを見せて戴き心より御礼申し上げます。これで三度目ですが、今回が一番感動致しました。同伴した妻も「パフエクト」と言って讃辞を惜しみませんでした。以前、見せて戴いた「釣女」の狂言も大変良かったのですが、今回はもっと良かったと思います。なぜ良かったのか自分なりに分析してみますと、今回の「藍の女」は日本版ミュージカルであったと言うことです。芝居だけの芝居もあり、歌だけの歌もあり、踊りだけの踊りもある。それらはそれなりに良いのであるが、今回は全体がストーリーのある芝居であり、その中で歌あり踊りありであった。

「白鳥の湖」のモスクワバレエにもレビューの宝塚にも負けない、計算し尽くされた、細部の細部まで行き届いた、超一流品であったと思います。ストーリーが良かった。役者の立居振舞いも良かった。歌も踊りも良かった。盛り上げも良かった。意外性も充分にあった。それに、畑代表の歌と三味線には恐れ入りました。畑代表が踊りの名手であると言うことは周知のことであり、踊りは当然うまいと思っておりましたが、三味線と歌がうまいとは知りませんでした。恐れ入りました。また、幕と幕の間の寸劇やオーベルの第九と阿波踊りを重ねてしまうという、奇想天外の発想も驚きと感動でありました。

「藍の女」はロングランの出来る作品だと思います。菊の会の代表作になる作品ではないかと思えます。これから寒くなつてまいりますが、この心温まる作品をもって全国の人々をあたためて下さい。有難うございました。

洋舞系のダンサーは本番や練習に拘らず、踊る前に入念な肉体のストレッチングを行う。これに対して、日本の古典芸能家、日本舞踊家は準備運動などせずにスッと舞台に立つ。それは後者にその習慣がないからではなく、舞踊を肉體運動とは考えていないからの違いのようだ。心と体が一つになる心身一如は武道家や哲人らのもっとも理想とする境地だ。日本舞踊もそれに近いが、技芸の鍛錬がある段階に達すると「舞踊は心だ」という教えが幅を効かせて、体の事はあまり言わなくなる。相撲は心技体で、あえて心と体の間に技という概念を挿入する。その大前提には勝敗があるからで、どんなに心が優れ、肉体が充実しても技が効かなければ結果としての勝利は得られない。古典舞踊の振りの手は千種もあるのに、それでも相撲のように技を前面に言わないのは勝負事ではないからに他ならない。結局、心身一如でも心技体でもない、日本舞踊家の目指す「舞踊は心だ」は、それらに比してなんとも曖昧かつ頼りなげに思える。日本舞踊の基礎はものまねにある。それゆえ、者や物、もの(霊や気配など)まで表現する日本舞踊家にとっては、それらを観察・感受する能力を磨く事がまず第一の条件となってくる。身体の屈伸や力の優位だけでは、何ものも立ち上がってこないのが日本舞踊だ。真似る事は師や優れた人の芸は勿論、世界を「真似ぶ」学ぶに通じる。そして、その究極にあるのが「心」を真似ぶ事。即ち世界を内包した自分の「心」を知り、表現する事。だから、舞踊家は「心」を真似ぶ事を第一の条件にして初めて、世界を感得できる種族の一員になるようだ。

パリー美容専門学校
校長 宮原 亨
Toru Miyahara



センター、



ミマル・シナン大学でのワークショップ

舞踊家の条件

筋肉運動ではない日本舞踊

舞踊評論家 村尚也

舞踊劇「藍の女」

三隅治雄 作・演出、畑道代 構成・振付の舞踊劇「藍の女」の上演回数を誇るこの作品を今回6年ぶりに再演。この度は初日を、千葉県後援、千葉県文化振興財団の主玉県教育委員会、越谷市、越谷市教育委員会、(財)越委員会からも推奨を受けた。

先年ドイツの劇作家ベルトルト・ブレヒトの生誕百年祭での大統領ヘルツォークの演説の一説「芸術は、社会的問題への対決の要請をなぜ放棄しなければならぬのか。楽しみや気晴らしをのみ求めることこそ、芸術の放棄ではないのか」を思いおこし、さらにブレヒトの作「三文オペラ」の名文句「銀行の設立に比べれば押し込み強盗など何ほどの罪か」を私の頭のなかから引き出してしまいました。こみあげる笑みを噛み殺しながら通路を抜けて出た表通りは少し寒かったがすがすがしい夜になっていました。孤軍奮闘・だが満席の観客の大拍手は舞台芸術の先進性への可能性を裏付けるに充分な現象でした。

「菊の会」の活躍と作・演出を担当された三隅治雄先生の労に心から感謝します。

「伝統のなかに未来がある」(朝日新聞掲載記事より・転載許可済)

畑道代先生確信をもって前進して下さい。期待しています。末筆ですが群舞は超一流でした。

【特別寄稿】



在トルコ日本国特命全権大使

阿部知之

Tomoyuki Abe

今から八十年前、オスマン・トルコ帝国が崩壊し、新生トルコ共和国が誕生してまもない一九二四年八月六日、アジアの両端に位置する日本とトルコは国交を結びました。もちろんそれ以前にも両国の間では様々な交流が行われていましたが、国交樹立によって両国は正式な友好関係をスタートさせたのです。以来、両国はお互いを思いやり、苦難の時には助け合って、真の友好関係を発展させてきました。特にここ数年、密度の濃い両国間交流が実現していることは、我々関係者にとって大きな喜びです。私たち日本大使館はこの秋、節目の年に更なる両国関係の発展を願って八十周年記念事業を実施致しました。

この事業に文字通り華やかな色を添えてくれたのが、「菊の会」公演です。初めてのトルコ公演に当たり、「菊の会」代表の畑道代氏をはじめとして関係者の方々が、「どのような公演にしたらトルコの方々には日本の踊りの素晴らしさを伝えられるだろうか」と頭を悩ませ、試行錯誤を繰り返して、遙か遠い日本から二度もトルコに下見にいらつしやいました。「菊の会」が設立以来三十二年にも亘る長い間、国内外で支持されてきたのは、完璧なものを追求する真摯な姿勢ときめ細やかさがあってこそなのだと思います。

十一月にイスタンブール及びアンカラで行われた三回の公演はどれも素晴らしく、私自身も大変感銘を受けました。特に、政治都市であるアンカラで二〇〇名収容の巨大なホールを埋めるのは並大抵のことではありませんが、当日会場をすっかり埋め尽くした観客が公演終了時に総立ちで割れんばかりの拍手を送っていたのは大変印象的でした。

菊の会公演が行われてから早一ヶ月が経ちましたが、トルコの方々や外交団の友人達から、いまでもあの公演の素晴らしさを賞賛して頂いています。心のこもった日本のおどりを披露して下さった畑代表はじめ菊の会の皆様、スタッフの皆様には心からの感謝を申し上げますとともに、今後の更なる御発展をお祈りしております。



阿部大使御夫妻と共に、アンカラ、土日基金

Email

トルコから
の
お便り

スナ・イルディリムさん

初めて畑先生と舞踊団「菊の会」に出会ったのは1997年、私が東京で日本語を学んでいる時でした。何人かの日本人の友人がいましたが、その中の小島さんに誘われて公演に行き、畑先生に私を紹介してくださいました。公演を拝見して、大きな喜びを得たとともに、畑先生という非常に素晴らしく、優美な方に出会えたことは、これまでにない経験でした。そして、舞台上で繰り広げられる優雅で調和を備えたチームワークに完全に魅せられていました。東京での日本語学校を終えた後はイスタンブールに戻り、カザフスタンでの事業の責任

者および課長として、住友グループに属する日産自動車株式会社で働くようになりました。それから7年の時が経ち、びっくりするようなニュースが畑先生からFAXで届きました。舞踊団がトルコでの公演を計画していて、どこか適した会場がないか探して欲しいとの事。私は興奮を抑えることができませんでした。どこまでお力添えが出来るか分かりませんでした。ただただ全力を尽くすのみでした。そしてそれはついに実現。菊の会の素晴らしい公演はイスタンブールのアタチュルク文化センターで開催され、日産の従業員全員、両親、そして

多くの友人達をこの傑出した舞台に招待しました。私にとっては2度目の菊の会公演でありました。幕が下りた時、ご招待した方々から、このように華々しい日本文化の素晴らしい舞台を観るこの時に居合わせる事ができたことを口々に感謝されたのでした。最後に、トルコで公演をして下さった畑先生はじめ舞踊団の皆さんに心より感謝を申し上げます。また、友人の小島さん、遠藤さんに、菊の会に出会わせて頂いた事にも感謝の思いでいっぱいです。そしていつの日かまた、世界のどこかで菊の会公演を拝見できる日が来ることを望んで止みません。



上：吉川総領事御夫妻と共に、イスタンブール、アタチュルク文化センター於

平成16年度文化庁国際芸術交流支援事業

トルコ公演を開催

菊の会トルコツアーに参加して

西村 允



前列右から二人目西村氏

ヨーロッパとアジアを結ぶ魅惑の地、東西の文化を融合させた独特の芸術性などエキゾチックで奥深いトルコで菊の会一行30名は10月29日から11月7日の日程でイスタンブールのアタチュルク文化センター、首都アンカラでは土日基金文化センター

ターソとしてシユラサロンで公演を行いました。
第1部に長唄「寿菊三番」長唄「石橋」狂言舞踊「釣女」第2部民族舞踊詩「海はるか日本を躍る」を上演、各会場とも盛況で各国の大使の来賓をはじめ多くの観客を迎え大きな反響を呼んだ。

菊の会がトルコで公演する、トルコの人たちもきつと喜んで迎えてくれるに違いない。感激する様子を見たい。十二時間余のフライト後イスタンブールに二十時無事到着。私たちの宿泊したスイスホテルはドルマバフチェ宮殿の上に位置しトルコでも最上級のホテルだ。翌朝は、ブルーモスク、トプカプ宮殿など、レベルの高い伝統と歴史の旧跡を観光。

夕食後、いよいよ文化ホールでの公演だ。日本からの女性は和服の正装、さすが菊の会の人たちは品位が高く美しい。現地の人たちも目を見張る。予想通り会場は満席、幕が上がるとすごい拍手、トルコの人たちは日本人が大好きなのだ。三番叟が始まると静まりかえる。日本の代表的な優雅な舞に魅了されているのだ。阿波踊りとその中の風、コミカルな味わいとリズム感あふれた踊りは舞台と客席に一体感を与え、手拍子が大きくなる。幕が閉じても興奮が覚めない様子。私は急いで、トルコの人たちをお送りすることにした。目が合うと語りかけて来て「チョクイイ、ベリーグッド、と硬い握手。そして数え切れないほど大勢の人と握手をした。

トルコ公演は、大成功だった。こんなに感激してくれたのだから。菊の会はトルコの人たちに途轍もない大きな、芸術性の高いプレゼントをした。そのことを実感し、満足感に浸りながら帰路についた。

舞踊劇「藍の女」を見て



双葉外語学校 高 碩 範

「素晴らしい！」公演当日、舞台のすぐ手前に座っていた留学生たちが、口をそろえて言った感心の言葉である。舞踊劇「藍の女」は、日本ならではの音楽をはじめ、キャストたちの素敵なお踊りやセリフ、鮮やかな衣裳や衣装など、まったく見たこともない外国人を感動させずにはおかなかった。

主人公のお葉は幼い頃母親を失い、人を信じず生きてきたかわいそうな女である。母親からもらった三味線、それひとつだけにしがみついて、彼女は悲しい人生を生きてきたのである。そんな彼女の姿は、自分の世界に閉じこもり、周りの人に心を開くことができず、苦しんでいる今の我々の

姿ではないだろうか。「陰の女-お葉」の悲しい人生を「陽の女-お葉」に変えたのは、「出会い」である。徳島の人たちは貧しい暮らしにも耐え辛い藍づくりをしていた。お互いに持ちつ持たれつ生きていく彼らの姿に触れ、彼女は心を開き始めるようになる。

人によって差はあるのだが、誰にでも他の人には言えない辛い思いや秘密はあると思う。しかしそれは、心の闇に葬るものではなく、乗り越えるものではないだろうか。公演が終わり、家に帰ってきてもなかなか寝れず、公演のことで私はいろいろ考え込まれた。

一人の留学生に過ぎないわたしがこ

んな素晴らしい舞踊劇を見たと言うことはとっても感動的なことだと思う。完璧だと言えるくらい素晴らしいお葉の歌や三味線そしてキャストの皆さんのリアルな演技に心を打たれた。美しいと言う形容詞はこんな場合に使う言葉だろう。特に最後の第十五景の「阿波おどり」は言葉では表現出来ないくらい素晴らしいものばかりだった。

素敵なお演技を見せて下さった「菊の会」の皆さまに感謝の言葉を申し上げます。韓国でも舞踊集団「菊の会」の皆さまの素晴らしい公演を見られます様に、ありがとうございます。(当日は双葉外語学校より40名の学生さんが来て下さいました。)

kikunokai インフォメーション

- 【おどり始め】
1月9日(日)菊の会スタジオ
12:00開演 **入場無料**
- 【新春1月公演】
13日(木) 町田市民会館
14日(金) アミュゼ柏
15日(土) 栗橋町総合文化会館イリス
18日(火) 石川県立音楽堂邦楽ホール
公演時間 14:00、18:30開演
(15日のみ15:30開演)
入場料 ¥5000【全席自由】(当日券¥5500)
邦楽ホール ¥6000(当日券¥6500)
- 【東京アトリエ公演】
1月28日(金)・29日(土)・30日(日)
2月25日(金)・26日(土)・27日(日)
3月18日(金)・19日(土)・20日(日)
21日(祝)
4月15日(金)・16日(土)・17日(日)
会場: 菊の会スタジオ
入場料: ¥3800【全席自由】(当日券¥4300)
- 【京都八瀬アトリエ公演】
4月 8日(金)・9日(土)・10日(日)
- 【友の会総会・懇親パーティー】
4月3日(日) 東京會館
11:00~総会・12:00~懇親パーティー
- 【さつき会】若者達の舞踊会
5月 5日(木) なかのZERO
- 《菊の会事務局03-5983-6001》

上記は予定に付き変更等御座いますので、ご確認をお願い致します。

「日本の芸の根っこよ、大樹の広がりを」



プロフィール
鶴岡幸子 Sachiko Tsuruoka
10歳より畑道代に師事、国内公演を初め海外公演にも参加、2000年東京新聞社主催、全国舞踊コンクール第2位
現在、畑代表の助手として若手メンバーを教える。
菊の会江戸川教室、助師グループの担当講師。

小さい頃から身体を動かす事が大好きで、とてもヤンチャなおてんば娘でした。菊の会へは当初、母が入会するはずでしたが、一緒に東村山教室に見学に行った折、自分と同年代の子供達が踊っている姿を見て「ワァー私も踊ってみたい！」と云う気持ちになり姉と私の二人が入会、その三年後の十歳の時に試験を受け、畑先生のもとでお稽古させて頂く事になりました。

一人で着物も着られない状態から楽しんで着られるまでになった今、着替えがとても一苦労だった頃を懐かしく思い出します。今では一日に何回着替えても苦にならず今日はこの着物が着たい、この着物にはこの帯をあわせてみよう、とても楽しんで着られる様になりました。目に見えない小物を綺麗にして楽しむ心、腰ひもから帯板一つにしてもその見えない所に気を配る、それが自分をより一層美しく輝かしてくれるのだと畑先生はいつも教えて下さいました。

十代の頃「嫌じゃ姫」と呼ばれていた私は、わがままで人と接する事が大の苦手でいつも姉の後に逃げかか



アンカラ、アタチュルク廟にて

れて行動すると言ったかなりの偏屈者でした。いつしか好きではじめて踊りもただ好きでなければやっていく事が出来ず・・・今日に至るまでには大変な紆余曲折があり、畑先生の並々ならない根気と愛情溢れるご指導のもと、ここまで引っぱって来て頂き感謝の思いでいっぱいです。

私の心の中で一番忘れられない場面は、伝統文化ポラ賞・優秀賞を頂かれた際に踊られた「夕顔」を拝見させて頂いた時の事です。私の身体に電撃が走りました。舞の崇高さと無限の広がりを感じ見る者をその世界へ引き込んで行く優雅にして芯の強い舞・・・あの時の感動は今も鮮明に覚えています。

この畑先生の精神、そして舞踊をいかにして継承し、伝え残していけるか、そうした思いの毎日です。日本の舞踊の正しい伝統保持者になりたいとの悩みと苦しみを突きぬけた自分らしい道が必ず開けるとの思いで今日より又新たな気持ちで後輩と共に自己の成長の為に毎日稽古に全力で取り組んで参ります。

Coffee Break